
アナタが好き（合体版）

神村律子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アナタが好き（合体版）

【Nコード】

N9229M

【作者名】

神村律子

【あらすじ】

アナタが好き。どうしようもなく好き……。

一話目は本格ホラーです。ご注意ください（苦情がありましたので）

そして、二話目以降は、全部二百文字小説です。

アナタが好き

アナタの事が好き。

辛い片思い。

あの日、駅のホームの自販機の前で落としてしまった十円玉をさり気なく拾ってくれたアナタが好き。

でも内気な私は自分の気持ちを打ち明けられない。いつも同じ電車に乗るのに、いつも、

「おはようございます」

って声をかけてくれるのに。どうしても言えない。

言えない理由。

私はつまらない人間。そしてつまらない事でカッとなってしまう性格だ。

この性格を直さないと、彼に告白できない。彼に嫌われたくないから。

でも直せそうにない。どうしたらいいのだろうか？

先日も親戚の法事でいつになく悪酔いした私は父の車で嘔吐し、酷く怒られた。

「何を考えてるんだ、お前は！　いくつになったら、酒の飲み方を覚えるんだ!？」

そんなに怒らなくてもいいのに、と思うくらい、父は怒鳴り散らした。

死んじゃえばいい。

ふと思った。

そしたら本当に父は死んだ。私はビククリした。

もしかして、私ってば、超能力者？　祈れば願いが叶うの？

傍らで号泣している母や妹達を尻目に、私は一人ぼくそ笑んでいた。

でも父が死んだおかげで、私はあまり行く気がしない会社を休めた。それは感謝する方がいいかな？

（ありがとう、お父さん）

私は父の遺影に手を合わせた。笑いを堪えるのが大変だった。そのせいで身体が震える。それを見た母が何を思ったのか、私を慰めてくれた。

「あんたも、悲しかったのね。ずっと我慢してたのね」

震える私を、泣いていると思ったようだ。間拔けな人。泣く訳ないじゃん。

私はこのクソ親父の死を願ったんだよ、勘違い母さん。笑っちゃう。

通夜、葬儀と、時間は過ぎて行く。

あれ？　ウチの会社って何日忌引きできるんだっけ？

親が死んだ時は、一週間だっけ？

しかも確か有給休暇扱いだよな？　ラッキーかも。これもあのクソ親父に感謝だ。

ああ。でも、このままだとあの人に会えない。

そんなに休んでも仕方ないや。家にいても陰気な顔した母と泣いてばかりいるアホな妹二人がいるだけだけだし。

だから私は言ってみた。

「泣いてばかりいられないから、会社行くよ」

母は私が強くなったと思いきや、あさけ違ひしてまた泣く。どこまで善人なんだよ、あんたは？　心の中で嘲る。妹達は、学校をまだ休むらしい。

あーあ。どうせなら、私が学校へ行ってる時に死んで欲しかったよ、お父さん。

それでもあの人に会えるのだからと思い、家を出る。

ホームに着く。いた。目が合い、会釈される。私はぎこちなく会釈を返す。

ああ。やっぱりアナタが好き。どうしようもなく、好き。

でも良く考えたら、アナタがどの誰なのか知らなかった。

私はその瞬間、忌引き延長を決意し、彼を追う事にした。

こんな機会を作ってくれたクソ親父に、もう一度感謝。迷わず成仏してね。

私は彼の乗ったドアの一つ先のドアから乗り込む。車内は臭い息を撒き散らすオヤジ共で溢れていた。

（邪魔なんだよ、てめえら！）

心の中で毒づくが、顔ではにこやかにする。

そしてアナタは電車を降りる。私も汚らしいオヤジ達を押しつけ、降りた。

アナタは私には気づいてくれず、そのまま階段へと歩き出す。

私も歩き出す。でも、邪魔なオヤジ達のせいでアナタを見失いそうになる。

ようやくオヤジ達の群れから抜け出した。

アナタは改札を通り、外へと出て行く。私も素早く改札を抜ける。

アナタの降りる駅が、私の降りる駅より手前で助かった。

長身のアナタは、私より歩くスピードが速い。ついて行くのが大変。

でも、そんなの気にならない。アナタの事が好きだから。

全然苦痛じゃない。むしろ、喜びを感じる。

歩くほどに、アナタの事がドンドン好きになる。

そして、アナタの勤めている会社に着いた。アナタは同僚達に挨拶しながら、回転ドアを通り抜ける。

やっぱり、アナタが好き。

私はそのまま会社に行く気にもなれず、かと言って家に帰るつもりもなく、ただブラブラと辺りを歩いた。

歩き疲れて、近くのファーストフード店に入る。

「いらっしやいませー」

騒々しい挨拶に迎えられ、私はウンザリする。

「ハンバーガー。単品で」

私はその後もいろいろと勧めて来るバカ店員を睨みつけ、ハンバーガーを受け取ると、代金を叩きつけるように置き、転がって下に落ちた十円玉を慌てて拾おうとする店員を一瞥し、店を出る。

少し歩くと、公園があった。そのベンチでハンバーガーに食いつく。

私を奇異な目で見ながら通り過ぎる若い母親達を気にする事なく、私はゴミをゴミ箱に投げ捨てた。

昼寝するには早過ぎる。そうかと言って、また歩くのは辛い。

私はそのまま、そこでボンヤリと過ごす事にした。

「あの」

誰かが声をかけた。

「何ですか？」

私は声の主を見上げた。そこには、汚らしい格好をしたジイさんが立っていた。

「少し場所を空けて下さらんか？ バアさんを休ませたいので」

ジイさんは、後ろでヒイヒイ言っているバアさんを見た。

私もチラッとバアさんを見る。そして、

「どうぞ。私はもう行きますので」

と白々しい愛想笑いをしてみせる。

「ありがとう」

ジイさんはバアさんを先に座らせ、自分も、

「どっこいしょ」

と言いながら座る。

こんな年寄りにはなりたくない。私はそう思い、公園を出た。

（てめえら、生きてても仕方ねえだろ？ 死んじゃえよ）

私は心の中でジジババの死を願った。

まさかとは思ったが、少し気になり、公園に戻る。

驚いた事に、ジジババは本当に死んでいた。周りには誰もいない。私はニヤリとして、その場を離れた。

凄い。凄い、凄い、凄いーッ！

私ってば、間違いなく超能力者じゃん！

もしかして、あの人も、念じれば私のもの？

わあお。嬉し過ぎておかしくなりそうだ。

よし。善は急げだ。即実行だ。

私はあの人の会社の近くで時間を潰し、あの人が出て来るのを待つ事にした。

これで私の願いが叶う。思いが通じる。

時が経つのは遅かった。

私は何度も眠ってしまいそうになり、そのたびに身体のアちこちをつねり、睡魔を追い出した。

「お」

ようやくあの人の会社の退社時間だ。人が出て来た。

汚いオヤジ共に混ざって、あの人が現れた。

私は全身全霊を込めて、祈った。

（私を好きになれ、私を好きになれ！）

しかし、アナタは私に気づかない。駅の方へと歩き出す。

（足りないの？ こんなくらいじゃ、足りないの？）

私は慌ててアナタを追いかける。

駅に着く。アナタはいつものホームへと歩き出す。私は小走りでついて行く。

そして同じ電車の同じ車両の違うドアから乗り込む。

今度は降りる駅がわかっていたので、私はちよつと気を緩めてしまった。

それがいけなかった。アナタはいきなり二つ手前の駅で降りた。虚を突かれた私は、降りる事ができず、その日はアナタを見失ってしまった。

仕方ない。また明日、頑張ろう。

私は陰気な母達がいる家に帰った。

「ねえ、あんた、今日、会社に行っていないでしょ？」
玄関に入るなり、母に詰め寄られた。

「用があつて会社に電話したら、休みではないのですかって言われたのよ」

「うるさいな！ 気分が悪くなったから、途中で休んでたんだよ！」

まだ何かを言おうとする母を無視して、私は自分の部屋に入り、鍵をかけた。

うるさい女だ！

死ねばいいのに。

そう思った。

あ。もしかして、お母さん、死んじゃう？

ま、いつか。その方がせいせいするかも。

私は夕食はおろか、風呂にさえ入らず、そのまま寝てしまった。

翌朝。妹達が騒いでいる。何だろうと思ひながら、部屋を出た。

「お母さんが、死んじやったよお！」

私はギョツとした。どういう事？

もしかして、私の「超能力」って、「死ね」しか使えないの？

あーあ。残念。仕方ない。あの人には、自分の言葉で伝えるしかない。

私は騒ぎ立てる妹達を突き飛ばして、家を出た。
こうるさい母親が死んだくらいで、大騒ぎするんじゃないよ！
そう思った。

駅に着く。いつもの時間だ。

「あ」

ホームを見渡すと、アナタがいる。つい、笑みが漏れる。
そして昨日と同じく、同じ車両の隣のドアから乗り込む。
ああ。ますます好きになっていく。

この気持ち、抑え切れない。

今すぐにでも抱いて欲しい。

はしたないなんて気持ちは全然浮かばない。

その方が興奮する。その方が素敵。

そしてアナタは電車を降りる。私も降りる。

今日は会社に着く前に追いつき、告白しよう。

それがいい。

アナタは改札を通り、外へと出る。私も続く。人ごみをかき分け、

アナタを追いかける。

あれ？

アナタはいつもの道から外れ、狭い路地に入っていく。

どうしたんだろう？ 私は不思議に思いながらも、アナタを追う。

どこに行くの？ まさか、私を誘っているの？

ああ。ドキドキして来た。

アナタも本当は私の事が好きなの？

だからこうして、人気がないところに誘っているの？

興奮して来た。胸の高鳴りがはつきりわかる。

汗も凄い。息遣いも荒くなる。

アナタが角を曲がる。私もそれに続く。

「あ」

そこは袋小路だった。アナタは仁王立ちで私を睨んでいた。

「何のですか、アナタは？　ずっと私をつけ回して。何かご用ですか？」

アナタの声は、怒りに震えている。私はビクツとしてしまった。「答えて下さい。事と次第によっては、警察に言いますよ！」

その言葉に私は衝撃を受けた。そして、震えを堪え、決断した。「アナタが好きなんです。付き合ってください」

死ぬ思いで言った。すると、アナタは、

「付き合ってくださいですって？　気持ち悪い。冗談じゃない！」

と怒り出し、私を押しつけるようにその場を走り去った。

私はショックのあまり、しばらくそこで呆然としていた。

どれほど時間が経ったのだろう。私は我に返った。

辺りは薄暗くなっていた。

（気持ち悪いって言われた……）

私はアナタの言葉を思い出し、泣いた。

そんな言い方、酷い。酷過ぎる。

涙が止まらなかった。

時計を見る。まだそれ程遅くない。今からなら間に合う。

この思いをもう一度アナタに届けたい。

わかって欲しい、私の心を。

必死になって走った。

何度も転び、顔も擦り傷だらけになった。

ようやく、アナタの会社の前に辿り着く。

息が上がって、苦しい。でも堪えた。

「あ」

アナタが私に気づく。汚いものを見るような目をする。

それでも私は怯まない。アナタに近づく。

「何なんだ、あんたは!？」

アナタはいきなり怒鳴った。私はその声にギクツとし、思わず足を止めた。

「どうしたの？」

「何があったんだ？」

周囲に人が集まり始めた。膝が震え出す。怖い。人の目が怖い。「こいつ、俺のあとをつけ回してたんだよ。またこんなところで待ち伏せしやがって」

アナタは汚い言葉で私を罵る。

「ええ？ ストーカー？」

近くにいた不細工な女が私を軽蔑の眼差しで見る。

おまえのような醜い豚に、そんな目で見られる筋合いはない！

そう叫びたかった。しかし、私の周りには、あまりに多くの人が集まって来ている。

限界だ。これほどの人数の視線に耐えられるほど、私の心は丈夫にできていない。

「気持ち悪いな。おい、あんた、一体何の用なんだよ？」

関係ない不細工なオヤジが、如何にも正義の味方風な言い方で私に詰め寄る。

てめえなんかに関係ねえよ！ そう怒鳴りたい。でも、今は無理。立っているだけで精一杯なほど、私は精神的に弱っていた。

「おい、こいつ、何を言って来たんだ？」

他の同僚が、アナタに尋ねる。アナタは吐き捨てるように言った。「付き合って下さいって言われたよ」

一斉にそこにいた連中が、

「キモー！」

と叫ぶ。私はもう立っていられなくなった。膝を着いてしまう。

「頭おかしいんじゃないの、こいつ？」

さっきの不細工なオヤジが言い放つ。

殺してやろうか、お前？

私は心の中で叫んだ。

「グエッ」

そのブサメンオヤジは、豚のような叫び声を上げると、地面に倒れた。

「いやあああっ！」

うるさいバカ女共が雄叫びを上げ、逃げ出す。

「うわあああ！」

アナタも腰を抜かさんばかりに驚き、

「や、やめろ、こっちに来るな！」

と絶叫した。

「何？ どうしてそんなに怖がるの！？」

私はアナタのあまりに酷い態度に切れてしまった。

「どうしてそんなに私を避けるの？ 気持ち悪いって何？」

私は自分の口から涎が垂れているのに気づいていなかった。

「わああ！ みんな、逃げろ！」

アナタは同僚達と走り出した。私はこみ上げて来る怒りを堪え切れなくなり、叫んだ。

「ぶざけるんじゃないよ、てめえら！ みんな、ぶっ殺してやる！」

私は包丁を振り上げる。

「みんな、みんな、殺してやる！ ぶっ殺してやる！」

私は怒鳴り続け、包丁を振り回し続けた。

「やめろお！」

何故か警察が現れた。

どうして？ まだ救急車も来ていないのに？

「まだ人を殺すつもりか！？」

私を取り押さえた刑事が怒鳴った。

記憶がフラッシュバックする。

この包丁で……。

眠っている父を刺した。

怯えるジジババを刺した。

うるさい母を刺した。

そして今、不細工なオヤジの首を切り裂いた。

「うおおお！」

私はそれでも抵抗した。アナタはそんな私を蔑むように見ている。

「抵抗するな！ 工藤信太郎！ 殺人及び殺人未遂の現行犯で逮捕する！」

こうして、私の片思いは終わった。

アナタが好き エキナカ編

アナタが好き。

アナタは同じ電車の同じドアから乗るからいつも私の前に立つ。

アナタは時々私を見てくれるけど、それはあくまで私のお客様だから。

それ以外の何ものでもない。

アナタが私に近づく。

ほんの一瞬だけど、アナタと触れ合う事ができる。

今日はいつもの紅茶を買わないのね。

私は同じ事しか言えないけど。

だから、こっそりサービスしちゃうわ。

アナタは私を見て大喜びしてくれた。

「おおお、自販機で初めて当たりが出た！」

ボクは君が好き

「ボクは君が好きだ」

真正面から告白した。その子は学園一と言われた美少女。

しかし、一笑に付されてしまう。

「ふざけないで下さい」

その上、

「私をバカにしているのですか？」

と捨てゼリフを吐かれた。

そんな事を言われるとさすがに傷つく。

親からもらったこの顔には絶大の自信があるのに。

服のセンスが悪かったのかな？

ボクはファッションに疎いからな。

次はもっと短いスカートにして胸の谷間を強調してみよう。

響子、頑張るぞ！

アナタが好き コンビニ編

アナタが好き。

また私のいるコンビニにアナタは来た。笑顔で友人達と共に。

私は只アナタを見つめる事しかできない。

声をかけられたら、どれほど幸せか。

無理な事はわかっている。

いけないとは思いつながら、アナタを目で追いかけてしまう。

ああ、アナタが私の方へと近づいて来る。

ジッと見てしまう私。

アナタはコーラとポテチを買い、行ってしまう。

目で追う私。その私に店長が気づいた。

「この監視カメラ、また向きが変わってるぞ」

ボクは君が好き 通学編

僕はある子の事が好きだ。

その子の名は由紀。

幼稚園からずっと一緒。

由紀は僕の事なんか眼中にないだろうけど。

それでも、僕は由紀の事が大好きなんだ。

夏休み前に告白する。

心に決めた。

角を曲がると由紀が歩いているはず。

僕は走り出した。

そこに由紀がいた。

「由紀！」

由紀が振り返る。僕は息を弾ませたまま、言った。

「由紀、好きだ、付き合ってくれ」

「バカなの、お前？」

そう言い捨てると、由紀よしのりは歩いて行った。

ボクは君が好き タバコ屋編

近所にあるタバコ屋。

大好きな看板娘がいる。

優しく微笑んでいて、初めて見たその日に恋に落ちた。

今日もその子に会いに行く。

ああ。いた。笑顔が素敵。

彼女になってくれないかな？

2ちゃんで相談してみた。

すると「取り敢えず突撃しろ！」とアドバイスされた。

僕はその言葉に後押しされ、タバコ屋に行った。

そして彼女に告白した。

「付き合ってください」

するとそばにいたオバさんが、

「そんなに欲しけりゃあげるよ、そのポスター」

アナタが好き あるお店編

アナタが好き。

アナタは私のお客様。

時々来店して、いつも私を選んでくれる。

アナタの指が私に触れる。

そのたび私は声を出してしまう。

ああ、そんなところに手を入れないで……。

ああ、優しく触ってね。

無理に入れたらダメよ。

順番があるでしょ。

優しく諭してあげる。

アナタは冷静になり、初めからやり直す。

そうそう。優しく、優しくね。

そして終了。

「ありがとうございました」

私が声をかける。アナタは、

「げ、残高が五十円か」

アナタが好き お化け屋敷編（前書き）

これぞ意味不明のホラーです。

アナタが好き お化け屋敷編

アナタが好き。

ずっと前から一緒に入りたかったお化け屋敷。

とうとうアナタと入れて嬉しい。

「俺から離れるんじゃないぞ」

少しビビりながらもそう言ってくれた。

「きゃあ、怖い！」

私はあまりの恐怖にアナタにしがみついてしまった。

「うわあ！」

アナタは驚いて走り去ってしまった。

そしてハタと気づく。

今日は私とデートじゃなかったんだ。

私も幽霊になって三年経つんだからいい加減アナタの事を諦めて、今の彼女に譲らないとね。

アナタが好き 純情編

アナタが好き。

でも私は遠くから見ているだけ。

アナタはエースで四番。

相手にしてもらえない。

今日もアナタは汗まみれになって練習する。

練習が終了。アナタはベンチで汗を拭う。

不意にアナタは立ち上がり、私の方に歩いて来る。

私はビククリして慌てて木の陰に隠れた。

あら？ アナタがいない。どこ？

後ろを見るとそこにアナタが立っていた。

「前から好きでした。付き合ってください、武彦先輩！」

アナタに告白された私は気絶した。

アナタが好き 禁断の愛編

アナタが好き。

私は立場も弁えず、アナタを好きになりました。

アナタの凜とした姿。心を震わせるような声。

許されないとは知りながら、アナタの虜になって行きます。

今日もアナタに会える。

私の気持ちは高ぶっています。

私はアナタが話をするのをうっとりとして聞きました。

まるでオペラのソロを聴いているようなアナタの素敵なお声。

アナタは私の様子に気づき、言いました。

「被告人は真面目に判決を聞くように」

ボクは君が好き 頬ずり編

ボクは君が好き。

今日も朝から可愛い君に頬ずり。

よく見ると魅力的なフォルム。

思わずもう一度頬ずり。

君は絶対に嫌がったり叫んだりしないから尚更喜欢きだ。

君は時々、美しい声で歌い出す。

ボクはそれにも聞き惚れる。

そしてまた頬ずりする。

もう絶対に放さないよ。

心の中で誓いを立てた。

人はそれを「きもい」と蔑むさげすだろう。

でも、ボクは気にしない。

ある日、彼女に言われた。

「そんなに好きなら、携帯と結婚すれば？」

アナタが好き 秋葉原編

アナタが好き。

私には将来を誓い合った婚約者がいる。

でも、どうしても止められないこの気持ち。

たまたま秋葉原のお店でアナタを見かけて以来、虜になってしまった。

彼には申し訳ない気持ちでいっぱい。

でも、こんな気持ちのままでは堪^たえられない。

私は彼とアナタがいるお店に行った。

彼に全てを打ち明け、私の気持ちを伝える。

「わかった」

彼はしばらくして言った。そしてアナタを見る。

「このシェア専用ザク下さい」

ボクは君が好き 運命の出会い編

ボクは君が好き。

多分、生まれた時から好きなんだ。

運命の出会いだよ。

君を放したくない。

ずっと一緒にいるんだ。

もう決めたんだから。

君なしでは、ボクは生きていけないんだ。

わかって欲しい。

ボクは口下手だから、うまく伝えられないけど。

この気持ちにウソはない。

ああ、どこにも行かないで、愛しい君。

ボクの思いが通じたのか、君は微笑んで戻って来て言う。

「はい、おっぱいでちゅよお、うまうましまちようね」

うん、ママ。

アナタが好き ミステリー編

アナタが好き。

それだけ書かれた手紙が直接家のポストに投函されていた。

心当たりがない。

非常に気味が悪い。何者なんだろう？

多分犯人はまた同じ事をする。

そう考えた僕は張り込みをした。

夏休みだからできる対抗手段だ。

一晩中自分の部屋からポストを監視した。

しかし犯人は現れなかった。

夜が明けた。

僕は諦めかけた。

その時だった。

犯人が現れたのだ。

意外な犯人に僕は思わず頬が緩む。

それは隣の幼稚園児のミコちゃんだった。

僕はキミだけが好き 執着編

僕はキミだけが好き。

あとは何もいらない。

ホントだよ。ウソじゃないもん。

だって本当に綺麗なんだもん。

その他大勢はどうでもいい。

アウトオブ眼中だよ。

キミを見ているとうっとりしてしまう。

キミのためなら高額なお金も厭わない。

最高のキミ。

それを手に入れるためなら僕は鬼にでも悪魔にでもなれるよ。

愛しいキミ。本当に好きなんだ。

でも聞き入れてもらえない。

今日も朝から大喧嘩だ。

「好き嫌い言わずに白身も食べなさい！」

アナタが好き 未来編

アナタが好き。

君はそれしか言えなくなってしまった。

あまりにも進行が早い。

手は尽くしたと言われた。

僕は納得ができず、あらゆる可能性を探した。

でも無駄だった。

君は日に日に衰えて行く。

自分が本当に情けない。

こうなったら、君の寿命が尽きるまでずっとそばにいるよ。

片時も離れずにそばにいるよ。

「アナタが好き」

君は虚ろな目で最後に僕に言ってくれた。

僕は号泣した。

友人が僕に言う。

「早く電池取り替えろよ、その人形」

アナタが好き 宇宙編

アナタが好き。

私はずっとアナタだけを見て来た。

気が遠くなるくらいの時間。

でもアナタはキヨロキヨロと他所ばかり見て私の事をあまり見してくれない。

最近はマーちゃんに気があるみたいだし。

この前近くまで来てくれたと思ったら、クルクル回っただけ。

酷いわ、そんな仕打ち。

私の事がそんなに嫌いなのか？　こんなにアナタを思い続けているのに。

もっと私を見て！

こんなに奇麗なのよ、私は！

「今日の満月、いつもより光ってないか？」

アナタが好き 宇宙編（後書き）

月は自転周期と公転周期がほぼ一緒なので、ほぼ同じ部分を地球に向けています。

アナタが好き 国技館編 (前書き)

河先生、ごめんなさい。>「」<

アナタが好き 国技館編

アナタが好き。

汗を飛び散らせて、土俵狭しと動き回るアナタが好き。

アナタと目が合った。

緊張してしまう。

普段はとてにもこやかな顔なのに土俵上では鬼。

その変わりようも好き。

私って変わっているのかしら？

この思い、気持ち悪い？

アナタに嫌われてしまうかしら？

それでもいい。私はアナタが好き。

アナタは今日も素晴らしい上手投げで勝った。

嬉しい、アナタが勝ってくれて。

私は思わずウィンクした。

「な、何すか、行司さん？」

ボクは君が好き 残暑編

また会えたね。

ボクは君が好き。

君はいつも冷たいけど、そこがまたいい。

思わず抱きしめたくなる。

この思い、止められない。

頬ずりして、撫で撫でして、君を愛でる。

それでも冷たい君。

嬉しい。それがとても嬉しい。

ボクはドMなのだろうか？

変態だろうか？

それでもいい。君が好きなんだから。

君にもう一度触れる。

微かに濡れている君。

そろそろ限界だ！

君を味わわせて欲しい！

友人が呆れ気味に言う。

「早く飲めよ、その缶ビール」

アナタが好き ファンタジー編

私は魔法使い。

魔王を倒すために旅をしている勇者様をずっとお慕いしている。

そして遂に魔王との最終戦。

勇者様は勇敢に戦い、魔王は滅んだ。

「みんな、ありがとな。やっとオラの悲願が叶っただ」

勇者様は涙ぐんで言った。皆、もらい泣きした。

私は誰もいないのを確かめて勇者様に近づいた。

「お慕いしておりました。私をお嫁にもらって下さい」

すると勇者様は、

「オラも女だぞ」

私はニコツとして、

「はい、知ってます」

と答えた。

アナタが好き スプラッター編（前書き）

改訂しました。よろしく願います。

アナタが好き スプラッター編

アナタが好き。

もうどうしようもなく好き。

だからアナタの全てを私のものにしたい。

脳天に一撃。

これでもうアナタは動けない。

私は陶然とアナタを見る。

流れるアナタの血。

その血すらも私のもの。

包丁で背中を切り裂く。

アナタはのた打ち回るけど私はそんなアナタの姿も好き。

アナタは私のもの。

どうして邪魔するのよ？ 私の楽しみだったのに！

アナタを捨てたあいつは許さない。

翌日、うなぎ屋の店主が妻に殺された事件が発覚した。

アナタが好き F-1編

アナタが好き。

サーキットを颯爽と走るアナタの雄姿。

遠くから見ているばかりで、私はアナタに近づく事ができない。

それほどアナタは輝いている。

私なんか、全く相手にされないくらい。

それでもいい。アナタが好きなのだから。

でも、そんな私に巡って来た千載一遇のチャンス。

今までは、雲の上の存在でしかなかったアナタに近づけた。

もうちょっと、あともう少してアナタに触れられる。

「おおっと、マシンが接触！ 大破しました！」

アナタが好き 極道の女編

アナタが好き。

そんな書き出しで、その腐れ女の手紙は始まっていた。

私はヤクザの組長の妻。

旦那の机の上を片づけていて、本の間に挟まっているのを見つけた。

組長に愛人がいても、見て見ぬフリをするのが妻の器量だと言う。

でもその女は「結婚したい」と書いている。

愛人で我慢できないのなら潰すしかない。

私は旦那が帰宅した時、その手紙を鼻っ面に突きつけて問い詰めた。

すると旦那は言った。

「それ、おめえがくれた手紙だぞ」

アナタが好き 人生編

アナタが好き。

小さい頃から好き。

小学生の時も中学に進学しても高校が別になっても、アナタが好きだった。

大学も別。

とうとうアナタは彼女を作った。

それでも私は動じなかった。

アナタが好き。それは変わらない。

しばらくして、アナタは彼女に振られた。

可哀想なアナタ。

アナタは私の事に遂に気づいてくれた。

「ボクは君が好き」

そう言われた。

私はその言葉で気づいた。

「私を好きになったアナタは嫌い」

そう、私はアマノジャク。

アナタが好き 極道の女編その弐

アナタが好き。

またそんな手紙を見つけた。

私はヤクザの組長の妻。

この前はちよつとした早とちりで恥を搔いたが今度は間違いない。

この筆跡は私じゃない。

性懲りもなく、その女は「結婚したい」と書いている。

許さない。白状させて、その女のところに乗り込んでやる。

そして、極道の女がどれほどのものか思い知らせてやる。

私は旦那の帰りを待ち、その手紙を鼻の先に突きつけた。

すると旦那は言った。

「それ、娘の手紙じゃねえか」

アナタが好き 歩道橋編

アナタが好き。

通勤途中、歩道橋の上ですれ違うアナタが好き。

寝ても覚めてもアナタが好き。

この気持ち止められない。

そして決断した。

今日、すれ違う時に手紙を渡そう。

ダメで元々だ。

歩道橋の上。

震える手でアナタに手紙を渡す。

アナタに受け取ってもらえた。

やった！ 嬉しくて飛び跳ねそうだ。

そして次の日。

またアナタとすれ違う。

アナタは手紙を返してくれた。

「こちらこそよろしく」

そう書かれた字の汚さに百年の恋も冷めた。

ボクは君が好き 部活編

「ボクは君が好き」

野球部の先輩から告白された。

確かに先輩はイケメンだし、エースで四番だ。

でも、自分にはそういう趣味はない。

「ごめんなさい。嬉しいですけど、やっぱり自分は女の子が好きなんです」

その言葉は先輩を酷く傷つけたかも知れない。

他に言い方がなかったのかと思う。

「そうか。わかったよ。でもボクは諦めない。いつか必ず君を振り向かせてみせる」

先輩は寂しそうに立ち去る。

「それまでさようならだね、みゆき」

アナタが好き 極道の女編最終章

アナタが好き。

私はヤクザの組長の妻。

またしても、そんな書き出しの手紙を見つけた。

二度も恥を掻いたので慎重になる。

旦那はヤクザにしては温厚だが、私の嫉妬深さには辟易しているらしいから。

今度啖呵を切って間違いだったら、私が離婚されちまう。

それでも訊かずにいられない自分の根性が情けない。

旦那が帰宅する。

私はもう一度、手紙を鼻先に突きつけた。

「そいつはおめえ……」

目が泳ぐ。私は言った。

「歯を食いしばれ！」

アナタが好き ストーカー編

アナタが好き。

差出人不明の葉書が投函されていた。

それが何日も続いた。

友人に相談する。

「放置すれば」

奴は面白がっている。

ムカつく。

ある日差出人らしき人物が現れた。

雨の日。

アパートの前に傘も差さずに。

長い髪の女だ。

俺の部屋を見上げている。

知らない女だ。一体何なんだ？

俺は耐えられなくなり警察に行った。

すると刑事達が驚いた様子で俺を見て、

「どうした、逃げるのに疲れたか？」

俺は自分が脱獄囚なのを忘れていた。

アナタが好き 勘違い編（前書き）

ギリギリです。

清純派の方はお読みにならないで下さい。

アナタが好き 勘違い編

アナタが好き。

一目惚れした同期の平井君にメルアドを教えてもらった。

メールを送信しまくったが、優しい平井君はその全てに返信してくれた。

やがて私達は付き合い始めた。

平井君には私の全てを見せるまでになった。

そんなある日平井君から「別れよう」のメール。

「君のような変態とは付き合いえない」

そう書かれていた。

何の事だろうと自分の送ったメールを読み返して蒼ざめた。

「アナタが好き」の「タ」が「ル」になっていたのだ。

アナタが好き 勘違い編（後書き）

失礼しました。ごめんなさい。

アナタが好き 宅配ピザ編（前書き）

帰って来てしまいました。

アナタが好き 宅配ピザ編

僕は新社会人。

今日は休日でアパートでのんびり。

呼鈴が鳴った。

ドアを開くとメイド服を着た可愛い女の子がドコノピザの箱を抱えている。

「お待ちどう様でした」

僕は覚えがないので断ろうとした。

女の子が潤んだ目で僕を見るので、

「あ、頼んだかな？」

「ありがとうございます」

代金を払い、箱を受け取る。

女の子が帰る。僕は溜息を吐き箱を開いた。

「アナタが好き」

そんな書き出しの手紙が入っている。

嬉しいより先に怖くなった。

ボクは君が好き 破れかぶれ編

ボクは君が好き。

君には好きな人がいるのは知っている。

でも、どうしても諦め切れない。

君がいる店に来た。

君が仕事を終え、出て来るのを待つ。

店の人達がボクに気づき、囁き合っている。

ボクは仕方なく店から離れ、君が出て来るのを待った。

しばらくして、君が歩いて来た。他の人達と一緒にだ。

「あの」

君が声をかけてくれた。君は隣の女性を見て、

「この子は貴方と付き合うつもりはないそうですから、つきまとうのはやめて下さい」

アナタが好き きっかけ編（前書き）

マニアの方、お待たせ致しました（笑）。

アナタが好き きっかけ編

アナタが好き。

とてつもなく好き。

でも私は「天下無双の引っ込み思案」と揶揄された女。

どうしてもアナタに声をかける事などできない。

ある時テレビを見ていて知った。

役者の多くは恥ずかしがりで、普段は人と話も出来ない人が多いと。

でも、役になり切れば、どんな台詞でも物怖じする事なく吐けるのだと言う。

私は決断した。それで行こうと。

アナタが歩いて来る。

私はアナタの前に立ち塞がる。そして話しかける。

「品川の次は？」

アナタが好き きっかけ編（後書き）

という訳でした。

アナタが好き いけない恋編（前書き）

どこまでいけない恋なのかはご想像にお任せ致します。

アナタが好き いけない恋編

アナタが好き。

私はアナタの視線を背中に感じる。

私がアナタの前にいるのだから当たり前だし、自意識過剰なのはわかってる。

でも感じる。確実にアナタは私の背中を見ている。

これ以上アナタの視線を感じていたら、どうかしてしまいそう。

でも今は授業中。いきなり逃げ出す訳には行かない。

私は耐えた。アナタの視線を意識しないように別の事に集中した。

でも遂に耐え切れず私は教室を飛び出した。

黒板に大きく「自習」と書いて。

アナタが好き 完結編（前書き）

今までありがとうございました。

アナタが好き 完結編

アナタが好き。

小さい頃から好き。

小学校でも同じクラス。

中学校でも同じクラス。

高校でも同じクラス。

そして私は告白する事にした。

もう、これ以上我慢できないから。

アナタを体育館の裏に呼び出す。

そして言った。

「アナタが好き。ずっと昔から好き。付き合って」

するとアナタは言った。

「ボクも君が好き。でも付き合えない」

私は驚いて尋ねた。

「何故付き合えないの？」

アナタは優しく微笑んで言う。

「だって僕らは双子だから」

アナタが好き 完結編（後書き）

日下部先生、ごめんなさい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9229m/>

アナタが好き（合体版）

2010年10月17日16時18分発行